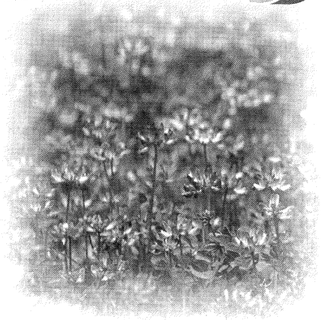
◆教職員と市民でつくる人権教育情報誌◆

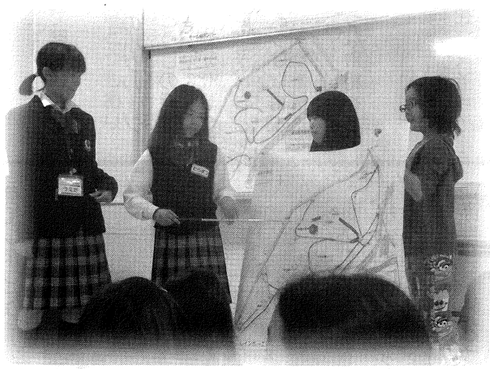
まいにち学校
まいにち街の中
こどもの笑顔に
つなげる

はじける こころ

vol.31

交流遠足での活動
みんなでバランスをとって「ぴょん！ぴょん！」





公園づくりワークショップで発表
「これが私たちの考えた公園です」

げんげのとは：蓮華草が生い茂った草原のこと。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を咲かせます。また、れんげ草は緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子どもたち一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました

特集１　「まち」と「ひと」を育てる人権教育　彩都の丘学園　…１Ｐ
特集２　人権教育モデルカリキュラム（部落問題学習編）　…３Ｐ
　萱野小学校　山北智さん　南小学校　横岩直子さん
　第二中学校　西川ひとみさん　田渕浩昭さん
連　載　わたしの人権教育　かやの幼稚園　竹田幸子さん　…５Ｐ
学校のお宝発掘（３）「教職員人権研修ハンドブック」　…６Ｐ
考えてみよう「障害？病気？」かわのひでただ　…７Ｐ
聴かせてよ「子どものきもち」将来の夢編　…８Ｐ

げんげのぺえじ　みのおから世界へ！人権文化の花束を！

聴かせてよ 子どもの気持ち

新学期が始まりました。中学３年生は、自分の特性、好きなことなどを見つめて、将来の進路を考える１年になります。今回は、第三中学校の生徒会の役員（新３年生）のみなさんに将来の夢について教えていただきました。

Q１「こんな仕事をしたい」　Q２「なぜしたいの？」

Q１　医者
Q２　いろいろな人の役にたちたいからです。

Q１　内科医
Q２　病気が治って喜んでいる人の笑顔が見たいから
とりあえず人の役に立てる人になりたい。

Q１　歌手
Q２　みんなにいろんなことを伝えたいから

Q１　警察官
Q２　いつも私たちの安全を守ってくれる警察官にあこがれたから。ドラマやドキュメンタリーを見ていて、事件の第一線で動いている刑事になりたいから。警察官になって民間人を守りたい。

Q１　検事・政治家
Q２　今の日本ではいけないと思うから。将来、私が日本を変えたいと思う。

今年度リニューアルした「はじけるこころ」に対し、箕面市人権教育研究会運営委員の皆さんからご意見をいただきました。

・身近な人のコラムや記事があり、大変読める内容になったと思います。

・30号「いきいきさわやかに学ぶ会」は若い教職員に呼んでもらいたいと思った。今後も「らいとぴあ21」の活動については載せてもらいたいと思った。

・「考えてみよう」では、実際に地震を体験した子どもの声が載っていて同年代の子どもたちにも伝わっていくものが大きいだろうと思います。

・人権教育に関するQ&Aとか意外と基礎的なことを知らなかったりします。

・どうしたら他の先生にも読んでもらえるかと私も悩んでいます。人権教育推進委員会で読み合わせなどをして活用してみるのもいいかなと思いました。

・今の問題、話題になっていることにつなげて参考になる本を紹介したりするのはいかがでしょうか。

・自分にとっても人権感覚を磨いたり知識を得ることができるのでこれからも読んでいきたいと思っています。

・「わたしの人権教育」では、自分があまり深く考えられていなかった部分に気づかされていい刺激になりました。

（編集委員より）
頂いたご意見を生かし、これからもよりよい紙面づくりに取組んでいきます。ご意見、ご感想はＦＡＸ（０７２－７２４－６０１０）または、Ｅメール(edujinken@maple.city.minoh.city.lg.jp)までお寄せ下さい。よろしくお願いします。

人権教育推進会議情報誌　『はじける　こころ』

発行　箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会
人権教育課　TEL　072－724－6921　FAX　072－724－6010
e-mail：edujinken@maple.city.minoh.lg.jp
平成24年（2012年）４月

人権教育推進会議委員
八木晃介、河野秀忠、蒲隆夫、安東由紀子、小島敦子、西村和浩、上田晃江、守帰朋子、永田千砂、小関政子、奥谷俊彦、結城美保里、卯滝勢津子、山下晴久、山北智、森崎直幸

「はじけるこころ」は教職員・PTA運営委員に配布しています。また公共施設にもおいています。
公開ホームページ：http://www.city.minoh.lg.jp/edujinken/jinken/jinken.html

「まち」と「ひと」を育てる人権教育

彩都の丘学園

本市で2校目となる施設一体型小中一貫校「彩都の丘学園」。子どもたちをつなぎ、9年間の学びをつなぐ取組が2年目を迎えます。その1年目の取組について、人権教育推進会議の小島委員が奥田教頭先生にお伺いしました。

（小島委員　以下「小島」）　まち自体が新しくできたとのことですが、市外から越してきた方も多いんですか？

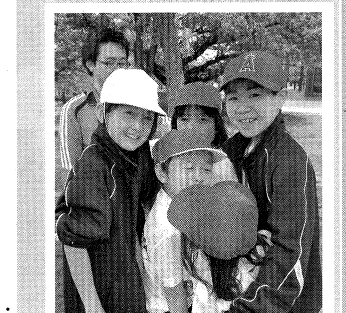
（奥田教頭先生　以下「奥田」）他市からの転入がほとんどです。遠くは関東方面からもお越しです。

（小島）子どもの雰囲気はどんな感じですか。

（奥田）子ども一人ひとりは、新しい学校で、新しい友だちといっしょに、勉強も運動も遊びもがんばろうと、とても意欲的です。

（小島）この学校ならではの取組を教えてください。

（奥田）一年生から九年生まで89人の子どもたち全員と、教職員が一堂に集まってランチルームで給食を食べます。この時間を利用して、学園委員会（児童生徒会）からの連絡をしたり、インタビューの形で転入生を紹介したりしています。学園のみんなで迎え入れることで、転入生の緊張も一気にほぐれるようです。



五月には全校で万博公園に交流遠足に行きました。縦割りグループで、いろいろな活動を行いました。この交流を通して、下の学年の子どもたちは上の学年に対して、あこがれや近い将来への夢や希望を、上の学年の子どもたちは、やさしさや思いやりの気持ちがもて、自信や自己有用感をはぐくむことができました。この関係は普段の学校生活の中でも築かれています。

（小島）人数が少ないことで難しいことはありますか。

（奥田）いつも同じメンバーの小グループで生活することで子どもどうしの絆は深まりますが、人間関係が固定化しすぎることもあるので、意図的に、子どもどうしのつながりを深めるような取組が必要だと考えました。

（小島）具体的にはどのような取組をされたのですか？

（奥田）各学年やブロック（前期一～四年・中期五～七年・後期八・九年）で、それぞれの発達段階に応じた「つながりプログラム」を継続的に行っています。自分の思いを伝え合うことで、お互いを認め合い、つながりを深めることをねらっています。

（小島）前期・中期・後期といったブロックごとの人権教育の取組を教えてください。

（奥田）前期では、異文化と出会い、違いを豊かさととらえることをねらい、在日韓国・朝鮮人の方をゲストティーチャーに招き、言葉や民族衣装などの体験をしました。また、国際交流協会の多民族フェスティバルの布アートプロジェクトに参加しました。

公園づくりワークショップ

中期では、まちづくりに参画することで、主体的に社会に働きかける力を育てることをねらい、公園づくりワークショップを行いました。学校の近くにできる大きな公園を、どんな公園にしたいか企画し、3・4年生も参加して行政や都市再生機構に提案するものです。

（小島）子どもたちからはどのような提案が出されましたか。

（奥田）当初は自分たちが楽しむことばかりを考えていたようですが、途中から、「坂を上っていくような公園なので、坂の途中で疲れた人のために、入ってすぐのところにベンチを置こう」、「ここの段差をなくしてスロープにできないか」といった、だれもが使いやすい公園にするという発想が出されるようになりました。

それぞれなじみのある土地からはなれてきた子どもたちにとって、この取組が、地域に愛着を持つきっかけになればと思います。

（小島）次に、後期の取組を教えてください。

（奥田）後期と7年生を対象に、6時間かけて部落問題学習を行いました。

（小島）どんな授業だったのですか？

（奥田）一つ例を挙げると、科学認識を深める授業は、江戸時代の様々な資料や、六陽、丙午といった例をもとに、差別や偏見の不合理さを理解する内容でした。

（小島）6時間の授業を受けて、子どもたちはどんな感想を持ちましたか。

（奥田）最後の時間には、「満員電車でちかんがいたら」という具体的な場面を想定して授業を行いました。「問題を解決のために行動することの大切さがよく分かった。いじめなど他のことにもあてはまる」などの感想が出されました。

中間つながりプログラム
「30秒スピーチ」

（小島）資料を見てどう思ったかを話し合ったりもするのでしょうか。

（奥田）人ひとりが思いを出し合うことで、大事にしたいことを子どもたちから引き出すような授業づくりをしています。

（小島）話は変わりますが、子どもの人権感覚を伸ばすには、家庭の影響が大きいと思います。学校で学んだことや学校が大切にしていることなど、どのように伝えていらっしゃいますか。

（奥田）本校では、防災講演会、備蓄倉庫の見学会、震災復興のチャリティーコンサートなど、保護者や地域のみなさんが学校に足を運び、学校に関心を持ってもらえるような取組を進めています。他にも、学校ホームページや学園だより、学級だよりなど様々な手段を使って保護者への情報発信を行っています。また、月に1回、スクールカウンセラーと保護者との懇親会を月に1回持っています。各回のテーマがあり、学習会やワークショップを行ったりするのですが、保護者どうしが子育てについて話す場にもなっています。

（小島）学校の情報発信に合わせ、カウンセラーや他の保護者の意見も聞けるのは心強いですね。今日はどうもありがとうございました。

（奥田）ありがとうございました。

《感想》

学校見学の際、施設面が新しく開放的なだけでなく、子どもたちの表情がとても良かったことが印象的でした。

小中一貫校ならではの様々な異年齢交流について伺いましたが、私は全校生徒89名揃ってのランチルームでの給食がとても素敵だな、と思いました。

子どもたちは訪問者の私にも当たり前のように挨拶し、気さくに話をしてくれました。そんな何気ない事が自然と身に付く環境こそ人権教育の出発点だと感じました。

（小島敦子）

編集委員おすすめの本

「最高のクラスのつくり方」

子どもたちにも先生にも必ず「ステキ」なチカラがある…永田千砂

どこにでもありそうなクラスに転校生がやってきて物語が始まる。手書きの素敵なイラストと読みやすく組み立てられている。子どもたちといっしょに読んでも、読み聞かせしても素敵だろう。

著者、岩瀬直樹さんが担任をしていた存在しているクラスの出来事であり、子どもたちと岩瀬さんが一緒になって学級を作ってきた記録の集大成としてこの本を作ったと紹介されていた。

何を決める時も、どんな時も子どもたちのもっているありったけの力が発揮できるように「先生」の立ち位置はいつも信じてそっとそばにいる。

一人ひとりに必ず力があり、それを信じて互いに意見を出し合い、その「信頼関係」がよりよいコミュニケーションを生み出し、素敵なクラスとなる。

問題解決も、役割分担も、一年間の目標も、みんな子どもの力によって決められていく。そのクラス、その学校、その先生だからできたのではない。

岩瀬さんが書いておられる。最初からこんなクラスづくりができたわけではないと…。多くの悩みや苦しいこと大変なことを重ねてこられ今があると…。

この本には、岩瀬さんそのものが子どもたちと一緒に発見してきた「最高のクラスの作り方の工夫」がとても分かりやすく描かれている。

岩瀬直樹さんの主な著書

『よくわかる学校ファシリテーション
1―かかわりスキル編
（信頼ベースのクラスをつくる）』

『よくわかる学校ファシリテーション
2―子どもホワイトボード・
ミーティング編』
（解放出版・共著）

『効果10倍の学びの技法』
（PHP新書・共著）

『学校づくりの「困った！」に効く
クラス活動の技』
（小学館・共著）
ほか

人権教育モデルカリキュラムづくり（部落問題学習編）

人権教育の原点ともいえる部落問題。系統だった取組が必要とはいうけれども、どうやって教えたらいいのだろうと難しく感じてはいないでしょうか？
今回は人権教育カリキュラム作成チームの会議の様子を取材し、メンバーにインタビューを行いました。

（写真右から）
はなして：山北　智さん（萱野小学校）
横岩直子さん（南小学校）
西川ひとみさん・田渕浩昭さん（第二中学校）
きき　て：守帰朋子さん　西村和浩さん（人権教育推進会議委員）

（守帰）カリキュラムづくりのねらいを教えてください。

（事務局　以下「事」）『新人権教育基本方針』に基づいて学校現場で人権教育を根付かせていくために、箕面市としてはこの学年でここまで押さえたいというモデルとなるカリキュラムを作っています。箕人研の実践をもとにこの一年間かけて、指導案の集積とねらいの明確化ということで取組んでいただいています。

（守帰）各学年のポイントとはどういったものでしょうか？

（事）義務教育9年間で、部落問題学習について、大きな目標を設定し、その達成をめざして前期、中期、後期のねらいを設定しました。

（西村）私には中学校、小学校の子どもがいますが、子どもたちの中では差別的な言葉が飛び交っています。人権教育カリキュラムの理想的な姿になるにはどうお考えでしょうか？

（西川）教師が子どもを一人の人間として尊重していくこと抜きにこのカリキュラムを進めるということはありえません。このカリキュラムは、被差別の当事者の方から話を聞き、教師自身が学びながら授業づくりをすすめて欲しいと思いながら作っています。
　一方で、クラスの子どもたち同士小さいときから相手を大事にするような人間関係をつくる取組を大事にしています。
　今回のカリキュラムにはそういった部分までは書いていませんが、「子どもの権利と人間関係づくり」という別の柱立てで、低学年での人間関係づくりのワークショップなどを取り上げていけたらと考えています。

（守帰）今回のカリキュラムづくりで大切になさったところはどこですか。

（山北）人権教育は特別な教育ではなく、日々の授業や生活の中で大切にしていくべき視点であると考えています。
　子どもたちにつけたい力をしっかりと見通していくことが人権教育でも良くないことは注意しあえる関係づくりが必要だと思います。

（横岩）子どもたち自身の人権感覚が育っていないといい話し合いになりません。あるし、箕面市としても人権教育が教育の基盤であるという方針でこの間やってきています。
　これまで培われてきた子どもを見る目や子どもたちどうしをどんなふうにつなげていくのか。それに対する教職員として向き合う立ち位置などをずっと継承してきましたが、教職員の急激な入れ替わりの中で、それがどうもスムーズでないのが現状であると考えています。
　一方的な知識の注入でなくどんな気付きが必要なのか、子どもたちが、自分のことを大事に思い、相手を慮る力をつける取組を考えてきました。今年度については、とりわけ部落問題について、9年間を前期、中期、後期の3期に分け、9年間でそういった力を子どもたちの中でつけていくことを中心に議論をしてきました。

（事）カリキュラムを作るうえで工夫したところはどこですか。

（横岩）事例に対して子どもたちの考えを引き出し、お互いに話し合う活動を大事にしています。そのために細かいところまで書いていない指導案になっています。

（山北）全ての学校園で子どもたちの様子はそれぞれです。カリキュラムに出てくる授業をそのままなぞれば、どんな子どもにもここに書いてあるような力がつくとは思っていません。教師がこれを見て、自分たちの目の前の子どもに教えるというときに、これをもとにして、「うちの子たちにはこんなのでは伝わらないから、もっとこういうことがいるんじゃないか」というのをどんどん付け加えて欲しいと思っています。これはあくまでも一つのモデルなので、極力シンプルなものを載せようということを心がけました。
　これをもとに、学年や学校で論議し、それぞれの子どもたちに一番いい授業をつくっていくことが大事だという思いを込めました。

（守帰）国語、算数でもいろいろな人権教育の取組をされている。そういったことも含んでいるということですよね。

（横岩）アサーティブトレーニングのようなものも含まれていますね。

（山北）いろいろな人権問題の根っこは同じというのが大前提なんです。自分も人もどちらも大事にするというようなところが人権教育の根幹だと思っています。子どもたちが、将来いろんな人権問題に出会ったときに、その人とどんなふうに子どもたちがつながっていけるのか、今回のカリキュラムが参考になればと思っています。

（事）作成されている思い　読者へのメッセージをお願いします。

（山北）子どもたちの現状を捉えながら、必要な力、めざす姿などいろんなものを付け加えて、教師と子どもたちの間でなされる授業のベースとしてこのカリキュラムが活用いただけたらと考えています。
　人権教育はいろんなことがわかっていないと出来ない特別なことではなく、子どもたちのことを考えて行う教育はすべて人権教育なんだということを一人でも多くの教師に実感してもらえたら思います。

（横岩）展開例があれば授業はしやすいけれども、学年や学校で相談することが大切だと思います。言葉一つの取り扱いにしても学校全体で一致することが必要なものもあります。校内で共通認識を持って取組んでもらいたいと思います。

（西川）「全ての学校園で」という言葉の裏には、子どもたちが今直面していない課題もあるかもしれません。子どもたちが生きていく上ではいろいろな人権課題に当事者として直面するかもしれません。その時に必要な知識や感覚、望ましい対応の仕方、他人事ではなく当事者として考えられるような姿勢を養うことが大事だと思います。うちの学校では関係ないかなということではなく、どんな課題についても一人の人間として考えるという姿勢を全ての学校園で養っていくことが必要だと思います。

（田渕）このカリキュラムは教師の一つの気づきのきっかけであって、どんな問題についても教員は人権感覚を研ぎ澄ましていかなければいけないと考えています。人権教育について学び、子ども、保護者、地域とつながって行けるような教師、信頼を得る教師をめざしていかなければならないと思います。

感想

カリキュラムをシンプルにしたのは、「学年や学校全体で論議を深め、共通認識を持って指導するため」と強調されたのが印象に残りました。話し合いを通じて子どもの考える力を引き出すとき、「人権感覚が育っていないと、いい意見は出てこない」とおっしゃいましたが、それはいくつになっても言えることで、私自身も感性を磨き続けていかねばと思いました。（守帰）

人権問題の学習をするには、友だちとのいい関係をつくることが絶対に必要だと思います。相手のことを気遣い、思いやることが人権の基本だと考えますが、今の子どもたちがそういった感覚をもてるようにするには、学校だけでなく家庭教育も重要だと思います。部落問題学習を行うだけで、部落差別がすべて解決するとは思えませんが、いつの日か、部落問題を過去のことだと言える日が来ることを願います。（西村）

※人権教育モデルカリキュラム（部落問題学習編）素案は4月中に学校へ配付を予定しています。

わたしの人権教育

かやの幼稚園　竹田幸子さん

今日は卒園式でした。2年間、楽しい思い出をいっぱいくれて、そのすてきな笑顔で癒してくれて、本当にありがとう!!年齢を重ねるごとに、そんな気持ちが増してきて、司会をしながらついつい涙もろくなって困ります。

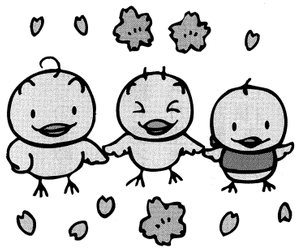
幼稚園は、子にとっても親にとっても、はじめての集団生活、社会へのデビューです。保育者は、はじめて保護者以外で親しく関わる大人です。だからこそ、その役割は大きいと思います。人への信頼感が育めるように、一人ひとりの子どもたちとていねいに関わることを心がけています。

私は、保健室の養護教諭です。どこに傷があるの？見えないくらい小さな傷を指さして「痛い。」と言う子、友だちにたたかれたと泣いて訴える子、しんどいと何か関わりを求めて保健室に来る子どもたち・・・。「ここが痛かったんだね。」「お友だちに叩かれて嫌だったんだね。」「お熱を計ってみようか。」子どもの思いを受け止めていねいに1対1の対応をすると、水道で洗ってあげるだけ、痛いところをさするだけで、子どもたちは納得して、気持ちを切り替えてクラスに戻っていきます。担任とは違った立場で子どもたちに寄り添い、協力し合って子どもたちの成長をサポートできればと思っています。

今は社会の中で安心して子育てしにくい時代です。人間関係も希薄で、保護者の方も子育てを肯定的に受け止められなかったり、どう対応して良いか分からなかったり、子育てに不安やとまどいがいっぱいです。そんな保護者の方にも寄り添っていけたらと思っています。私自身、子育ての中で子どもの不登校を経験して、暗い暗いトンネルの中で、どうしたらいいのだろうとわからなくなった時もありました。周囲のいろいろな人たちの支えがあって、人とのつながりの中で、前に進むことができました。孤独の中で人は前向きにはなれません。せっかくの苦い経験!?この経験も生かして、保護者の方が少しでも子育てに前向きになる手助けが出来ればと思っています。

「相手が子どもであっても、大人であっても、しっかりと思いに寄り添い受け止める」そういったつながりを築いていくことが、私が人権教育を進める上で大切にしたいことです。

第二中学校区で、小・中学校合同の学習会や研修会、地域の方を含めた会議に数多く参加して、いろいろな意見を聞く事ができ、とても刺激を受けています。人とのつながりが広がることは人生を豊かにしてくれると思います。これからも、様々な世代、多様な人との出会いがある研修や場に積極的に参加して、自身の人権感覚を磨いていきたいと思います。



学校のお宝発見（3）

「教職員　人権研修ハンドブック」

子どもたちがこんな様子を見せた時、あなたならどうしますか？

このハンドブックには教育委員会等が作る多くの冊子との決定的な違いが2つあります。

①「指導した内容に子どもが納得しない」「子どもが命を軽んじるような言葉を使っている」といった子どもが見せる具体的な姿から取組や日々の子どもとの関り方を見直すことができます。右記の2例を含む33の問題に答える形で、指導の手立て、ポイント、大阪府が作成した指導事例集や冊子類の中から、関係のある箇所を紹介しています。

②読むだけでなく、加筆して個人や学校のオリジナルを作る、校内研修でグループワークの題材にするなど、いろいろな活用方法が考えられます。ドキュメント形式のファイルを大阪府教育委員会のホームページからダウンロードできます。

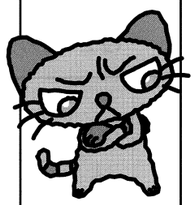
気になる子どもに寄り添う大阪の人権教育のエッセンスがぎゅっと詰まった一冊です。ぜひごらん下さい。

大阪府教育委員会
平成23年5月更新

考えてみよう

「考えてみよう「障害？病気？」

かわのひでただ



お母さん

ボクなあ、困ってるねん。時々やけど、学校に行きたくなくなるんや。学校に行っても、教室のイスに、じっとしとられへんねん。なんでかわかれへん。ボクが学校休むと、先生が、家に来て、

「学校においで。」

って言って、お母さんと話し込むねんな。そして、先生が帰ると、お母さんは、ボクに話しかけようとするんやけど、うまいこと話がつながれへん。そやから、お母さんは、ボクの顔をジ～ッと見つめるねん。

その目に、ボク困ってるねん。

先生

ボクのクラスの先生な。ごっつうやさしい先生や。ボクが学校に行くやろ。そしたらな、いつもニコニコして、ボクに話しかけてくれるねん。

「今日は、うまく学校に来れたんやねぇ。」

って。まぁ、ボクは、うれしいし、そんな先生がスキやけど、どうしてか、ボクが教室や、学校のどこにいてても、先生は見てるんや。そして、ボクが何をしてても、ニコニコ話しかけるんや。そのニコニコに、ボク困ってるねん。

友だち

クラスのともだちは、あんまりボクに近づかないよ。なんとなく、ボクとの間に力べがあるみたいや。ロをきくと、絶対、聞きよんねん。

「どうして、毎日、学校に来ぇへんの。学校に来るんがフツーやろう。」

って。そして、ボクとカンケーなく遊んでる。毎日、学校に行くんが、フツーなんかなぁ。フツーって、なんやろか。

そのフツーに、ボク困ってるねん。

カンケーがあるんか、ないんかわからへん、ヘンな人

あるときからな、ボクのクラスに、一週間に一度、ヘンな女のひとが来るようになったんや。クラスに来ると、ボクにばつかし話しかけるんやで。そしてや、ボクを目で追っかけたおしよんねん。カナンでぇ、ホンマに。先生に、

「あのひと、なんやねん。先生でもないし、PTAでもないし。なんのカンケーがあるひと？」

って聞くと、先生が、

「あのひとはね、スクール・ソーシャル・ワーカー（SSw）といって、クラスで問題のある子どもの相談にのってもらっているんだよ。君のために来てくれているんだ。」

と教えてくれた。だからボクは、そのひとに、

「ボクのために、このクラス来てるん？なんで？」

って聞くと、そのひともニコニコしながら、

「あなたは、発達障害という、病気なの。わたしは、あなたとたくさんお話をして、その病気を治そうとして来てるの。」

だって。

そのひとに、ボク困ってるねん。

車イスの、のんちゃん

前にな、同じクラスの車イスを使っている、のんちゃんに聞いたんや。

「のんちゃんは、車イスやけど、なんの病気なん？」

って。そしたら、のんちゃんは、

「私は、病気じゃないよ。こういう障害なの。病気は、治るけど、障害は、治らないんよ。」

と教えてくれた。あのヘンな女のひとは、ボクは、発達障害だけど、治るといってた。ボクは、病気なんか、障害なんか、そのことで、困ってるねん。

ボクは、ヘンかなぁ。フツーじゃないんかなぁ。

ホントーに、困ってるんやぞ。ホントーに困っているんは、ボクなんやぞぉ！

もうすぐ、新しい1年生が入って来るのになぁ。

- あなたのクラスに、障害のある人はいますか。
- あなたのクラスに、病気のひとはいますか。
- 毎日、学校に行くことは、フツーでしょうか。みんなで考えてみましょう。
- 先生は、あなたたちと、いっぱい、いっぱい、お話をされていますか。先生と一緒に話し合いましょう。
- 仲間はずれになっているひとが、いないかどうか、クラスで考えてみましょう。

スクールソーシャルワーカー（SSW）について

全国でいろいろな取組がすすめられています。箕面市においては、SSWは子どもを支援するために、教職員や関係者に対するアドバイスを行っています。